アピ

２０１３年
４　号

文学を愛する会

田代 雅 57 (中蔵9229)

感謝したいんだ。今日は、朝から一度も動悸が起きなかったんだ。自然の景色を見ながら登山していたら、身体のことを忘れていたようだ」

いつのまにか、香織への感謝の言葉を口にしていた。

「本当っ…良かった。少し、心配だったけど、来たかいがあったわ。ねぇ、明日は、早起きしてこの頂上から日の出を見てみない」

振り向いた香織の笑顔を見つめながら直樹は何度も頷いていた。

参考図書

植物の生き残り作戦　井上　健著（平凡社）

高山植物　菅原　久夫著（小学館）

○友修（ともしゅうじ）プロフィール

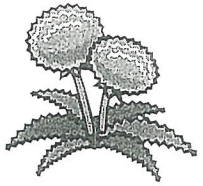
茨城県笠間市在住　一九五一年生まれ

本名　田中　修

文学を愛する会・同人誌「アピ」編集者

私達は、アピを応援しています

アピも青春、そして、私たちも今・・・



サークル「たんぽぽ」

1970年代に青春を迎えた
東京保母専修学園（現東京保育専門学校）
８名の仲間です
年一回の旅行会実施中

〒946-0088
新潟県魚沼市大湯温泉329
代表　桜井（旧姓 高野）和恵

原発避難者の声
―帰れない現実―

大友章生

1．警戒区域見直しについて

私が住んでいた南相馬市小高区（福島第一原発から20km圏内）は、平成24年4月16日に警戒区域の解除となり、新たに空間放射線量率の基準に合わせて、避難指示解除準備区域、居住制限区域、帰還困難区域に見直されました。

警戒区域見直しを受け入れた市長には、一刻も早く小高区の復旧・復興を進めようとの思いがあったのでしょう？　警戒区域解除から何がどう復旧・復興したのか、私達の目にはそれが見えてこないのです。行政の進め方と私達の望むこととの違いなのでしょうか。行政は、住民が帰還する為には先ずはインフラを整備しそれから除染を進めようとの思いがあったのかも知れません。一方、住民の方は家に戻って家の中を整理するといっても、長期間放置されていた家の室内はネズミ、そして外はイノシシ等の大小動物に荒らされ放題でどこから手を付けたらよいか戸惑うばかりです。

除染が全然されていないところでの作業には放射線量のことが心配（しかも、健康管理は自己管理となっている）で、長時間の滞在は無理です。

見直しから1年半が過ぎ、一部インフラの整備は認めても同時に除染を進め放射能の心配からの解放を進めてもらうことを待つ日々であります。

このように、除染が全く進んでいない現状を目にする時、警戒区域見直し時の住民への説明が不十分で理解されないままでのスタートが、行政への大きな不満となり、

住民の協力を得られないまま、いたずらに時間だけが過ぎ去っている感じがします。

2. 除染の状況

国による警戒区域設定（平成23年4月21日）・避難指示は、原発事故による放射能拡散による人体への被曝・健康障害を考えての対応であったと考えます。

事故から2年半、地上に付着した放射能の線量は時間の経過と共に下がったとはいえ、住民が自宅に戻る上で解決しなければならない事は、除染・インフラの整備・原発の現状の把握等々があります。その中でも一番の心配事は、放射能による健康への不安です。順序をつけ、スピード感を持って当たってもらう事を住民は求めています。

除染についての国の方針は、除染によって出た汚染物質の処分の最終処分場を福島県外で数十年後に、その間、中間貯蔵施設を原発のある3町に保管するとしています。この国の方針を本気で信じる事の出来ない3町の地域住民が、中間貯蔵施設の受け入れに結論を出さないままで、設置候補地のボーリング調査を受け入れ調査が行われています。また、除染を進める国（環境省）は、旧警戒区域では各市町村・地域ごとに仮置き場を設けて3年程度保管するとの方針を出していましたが、去る9月10日、災害廃棄物処理の行程見直し、除染の平成25年度内の完了時期は断念し、改めて市町村と協議した上で決めると発表しました。このように完了時期の明示が先送りされたことに対し、避難者からは「将来の計画が立たない」「期限がわかれば我慢もできるし、目標も立てられるのに」との声が聞かれます。

地域住民は当初から、除染の平成25年度内の完了は無理であると口にしていました。現場・現状、住民の声に耳を傾けないで進める行政に怒りと一層の不信に繋がり、協力は得られない結末です。

私達の住んでいた小高区神山では、国の方針を信じることが出来ないところがありますが一刻も早く除染を進めるため、平成25年3月、仮置き場を地区内に設置する事に同意して協力をしたものの、今だに（10月）全く手のつけられない状態のままで住民の仮設住宅での生活は先の見えない3回目の年末に向かっています。

3. 国や東電、自治体への要望

私達が古里へ戻るためには、次のことが必須条件となります。

①除染が完全に実施され、放射能の恐怖から解放された時。

②福島第一原発の完全な収束。

③インフラの復旧（上下水道、鉄道・道路、医療等）

④東電の現状から考えて事故を想定した私達の身を守る安全対策、避難マニアルの作成（日常的に放射能の状況を知ることが出来ること、避難道路や場所等の整備）

⑤帰宅後の支援（長期間放射能にさらされた室内の除染や地震で損傷した所を修理する為の時間と修理業者の確保等々）

警戒区域見直しから1年半、私達の目に映るものは復旧・復興への歩みよりも、仮置き場や仮仮置き場の地区内への設置など、古里への帰還を考える上で障害となる状況は、心が折れる事ばかりです。

福島第一原発で事故を起こした原子炉の内部の状態を知る事は出来ないが、汚染水の問題をはじめとして以前からその場限りの場当たり的な対応、隠されていたのではと思われる異常事態が次から次と出て来て不安が増すばかりです。夏季五輪東京開催招致で招致委員の一人は「東京は福島から250km離れているから安心だ」の発言は「福島は危険」と言う事でしょうか。東京の人が福島の人々へ寄せる言葉としては悲しい一言であります。

安倍晋三総理の突然とも思える、第2回目東電福島第一原発視察（9月19日）は何を意味するのでしょうか。視察は地元報道機関に公開せず、取材も内閣記者会に所属する全国紙や通信社、主要テレビ局に限られるなど疑問が残ります。「汚染水も完全にコントロールしている」と発言した0・3平方キロはどこかと、東電幹部に尋ねられたとの報道や、せっかく視察に来たのに、被災者と会うこともなく、思いを寄せる言葉もなかったことは誠に残念でなりません。

汚染水漏れ対策として原子炉建屋への地下水流入や海への流失を防ぐ「凍土遮水壁」も実際に設置できるか不透明とのことです。今の状況を見ると福島第一原発事故は全く収束していないばかりか一層深刻な事態になっていると考えています。

4. 神山友愛の里通信

小高区神山地区の交流を図るため、震災後の平成23年5月に発行した「神山友愛の里通信」もこの10月で30号になりました。配布先は県内を中心に沖縄など各地へ避難している神山地区住民34世帯、47ヵ所です。毎回、私宛に届く避難者の声の一部」（通信25号：平成25年4月26日）を紹介します。

☆大震災・原発事故以来三年目になりました。東京の桜

はほとんど散ってしまいました。通信24号届きました、有難うございます。

毎月送られて来る南相馬市からの広報誌等でいろいろ情報を知ることが出来て嬉しいです。3月21日に届いた広報誌には「仮設入居4年に延長へ」という文字が目にはいりました。目にした時は喜んでいいのか、悲しんでいいのか迷いました。また、現状を踏まえると4年の延長では済まないだろうと書いてありました。

自分の住む家がないのが、こんなにも辛い事だとは今迄考えた事が皆さんにもなかったと思います。神山の皆さんの近くに暮す事が出来る様に祈るのみです。福島にいる妹が3月10日に一時帰宅した時、シゲ姉ちゃんもう神山に住むのは無理だよと元気のない声で神山の自宅から電話をもらった時には覚悟していたとは云いショックでした（山田シゲ子・東京へ避難中）。

自分の住む家のない辛さは避難者全員が感じていることです。国や東電・自治体は、私達が一日も早く古里に戻れるよう全力を挙げて努力すべきです。

今年の6月9日～10日には、埼玉県戸田市年金組合の方々が福島の原発・県民の生活はどうなっているのか、マスコミ報道は信じられず、疑問に思って現地研修旅行（バス一台）に来ました。私が小高区・隣接する双葉郡浪江町を案内し、その時の感想が通信28号（8月20日付け）へ寄せられましたので紹介します。

☆深緑とても美しい山々住み慣れた我が家が原発事故によって、全村民が避難余儀なくされた飯館村、田んぼのあちらこちらに黒い袋が山積みに、家の軒先にはカーテン、人影がない。

南相馬市小高区に入っても、人影がなく田んぼは雑草一面、津波に流された車が放置されたままでした。浪江町では、地震の傷跡がそのまま残っており流されて来た漁船がいたる所にあるだけでなく家がつぶされたまま等被害の実態を自分の目で見た時には何が収束か、原発事故によって被災者はどれだけ苦しみ、自分の家に何時帰れるかわからない事を思うと許せない気持ちで涙がとまりませんでした。

原発事故は政府の政策で事故を招き、その誤りを認めず被災者を苦しめている事になぜマスメディアも追及しないのか、賠償も事故の要因も発表しないまま再稼働の動きは、被災者の気持ちを何も分ろうとしないことの現れです。地震は自然災害ですが原発事故は人災と訴える大友さんに私も同感です。将来を担う子供たちの為にも原発はノー、一声をあげて行きたいです。その為にも現地を出来るだけ多くの方に自分の目で見て欲しいと様々な方に訴えていきます。お忙しいところご案内いただき有難うございました（女性）。

☆『今フクシマを自分の目で確かめたい』『今フクシマに行かなくて何時行くのか』そんな思いに突き動かされての参加でした。

南相馬の住民、大友さんが途中からバスに同乗し、大津波と放射能被災地の『今』を話してくれました。『農』も『漁』も奪われ、わずかな補償金で我が家をはなれて暮らす毎日、経験しなければ分からない苦しさです。大友さんが言います。『親を喜ばせようと思って、建てた家、放射能汚染で住めなくなりました』『何もない所ですが、この神山の風が大好きなんです』と。

荒地の中に取り残されている漁船や草などの残骸、草ぼうぼうの田畑、高級車の中にぺんぺん草が生えているのも哀れでした。フクシマの苦しみは終わってなんかいません。これからもフクシマをわが事として繋がって行きたい、そんな思いで帰って来ました」（男性）。

県外の方に、被災地の現状を直接見て、肌で感じていただきたいとこれからも訪れる方の案内を続けたいと思っています。

5．支援者等との交流

避難生活を続けている中で、次に紹介する方々から継続した心暖まる支援を頂いております。

○アメリカ在住の方で、原発事故直後から仮設住宅などを訪問してボランティア活動をされている山本ユリさんは日本に来る度に避難先の私の家を訪ねてくれております。

○東京板橋区の障がいを持つ50代の女性から「神山友愛の里通信」発行のお役に立てて下さいと支援金の送付や電話の励ましを頂いております。

○肉親との別れや心の苦しみを経験し、必死に生きている60代の秋田の女性からは、何かお役に立ちたいと年金の中から支援金や土地の名産を送って下さいます。また、私の家にも訪ねて頂きました。

○脱サラから農業に生きる喜びを見つけ、自分達の生産した産物を支援して下さる長野県に住む方もおります。

○愛犬を通して、高齢者や障害者交流を続ける東京在住の方からは、定期的にお手紙を頂いております。

ここで紹介できなかった方々からも、たくさんの心暖まる励ましの言葉や支援金を頂きました。また、昨年は、アピ3号へ寄稿した原発避難住民の声を読んでの心暖まる励ましの言葉や感想を頂き感謝しております。

96歳の母は、皆様への感謝に少しでも役に立てればと、アクリルタワシを編むのが日課の様に楽しみとなっています。

本当に皆様ありがとうございます。紙面をお借りしましてお礼申し上げます。

6. 古里を思う

東日本大震災と東京電力福島第一原発事故から2年半、原発事故後の復旧・復興の現状の様子と先の見通しのない厳しい生活が続いている状況を考えると、震災の風化が大変気になります。

安倍晋三首相が政権交代後の所信表明で「福島の再生を必ず加速させる」と語りました。しかし、東電任せの遅い対応、汚染水問題で世界から注目されて突然福島第一原発5・6号機の廃炉を発表、苦しい避難生活をしている住民へ目線・思いは、向けられているのでしょうか。

2020年の東京五輪開催決定は、関係者の努力と喜ぶ映像を見て嬉しくもあり、感激もしました。

一方、7年後までには我が家に戻って生活をしていられるでしょうか？　東京に行ってオリンピック観戦、選手を直接応援することが出来るでしょうか。

東京五輪開催は震災からの復興を加速させるとPR、お祭りムードに沸く東京と避難者14万7千人に上る福島の現実との温度差は心に痛く感じます。仮設住宅で生活をしている人の中には、テレビのチャンネルを替えてしまうとの声もあります。

今の東京の繁栄は東電福島第一原発による電気の供給の賜物であり、現在でも県内から火力・水力によって多くが供給されている事を忘れないで頂きたいものです。

7年後、被災地の方も一緒になって世界の各地から沢山の観光客と選手を東京五輪にお迎えし、心から歓迎・喜び応援出来ますように国・東電は復旧・復興に全力を注いで頂きたいものです。

お墓参りや家の廻りの整理に、一時帰宅する度に脳裏に浮かぶ事があります。

春の早苗が整然と植えられた水田、秋は、黄金の稲穂が波打つ古里神山の自然は美しかった…。

四季折々に行われた神山地区の年中行事、春の宮田川沿いに咲くサツキ・ツツジの花見にはじまり真夏の炎天下で老若男女の住民が参加して行われた大運動会…。

秋には、地区の人々の心の支えとなっている神社の祭りや自分達の作った自慢の作物を持ち寄って楽しんだ収穫祭など、三世代家族や一人暮らしの方も互いに手を取り合い助け合っていた神山地区の人達の顔、顔、顔…。

そしてお盆やお正月・春・秋の彼岸に集って来た我が家を巣立った兄弟・親戚の面々…。

何よりも、今は96歳になった母の孫・曾孫達の集まりは、合宿所・民宿のような賑やかな我が家でした。

最近、危惧することがあります。見通しのない仮設住宅での避難生活は、家族をそして地域をばらばらにし、心を離ればなれにしているのではないかと考えられます。特に、放射線に汚染された古里への考え方は世代間の相違を生み家族の絆を危うくしているように思われます。また、東電の賠償金は魔物となり地域コミュニティの崩壊に繋がる恐れも感じられます。

阿吽（あうん）の呼吸の中で生活してきた農村地域の私達にとって、ばらばらで生活することは、お互いの心を離れさせ大切なものを失うのではないかと思われます。

一日も早く、元の生活に戻りたい、それが私を始め避難者の切実な願いなのです。

○大友章生プロフィール
福島県南相馬市（旧小高町）出身
元中学校教諭

私達は、アピを応援しています

「アピ」第４号おめでとうございます。
新しい創作・エッセイなど毎回楽しみにしております。
ますますの発展を！

グルッポ・テアトロ

白岩　知明

グルッポ・テアトロは演劇の企画上演グループです。
2007年１月に結成しました。
現代に生きる人が抱えている問題の、核心を突いた
作品選びをモットーとしています。

〒165-0032　東京都中野区鷺宮 4-31-11-301